

3
エリシャ
聖徒伝 127

「主の憐れみに 生かされて」

列王記第二 6～7章

エリシャのたたかい

アウトライン

0. イントロダクション

I. 浮かんだ斧 6章1～7節

II. 天の軍勢 6章8～23節

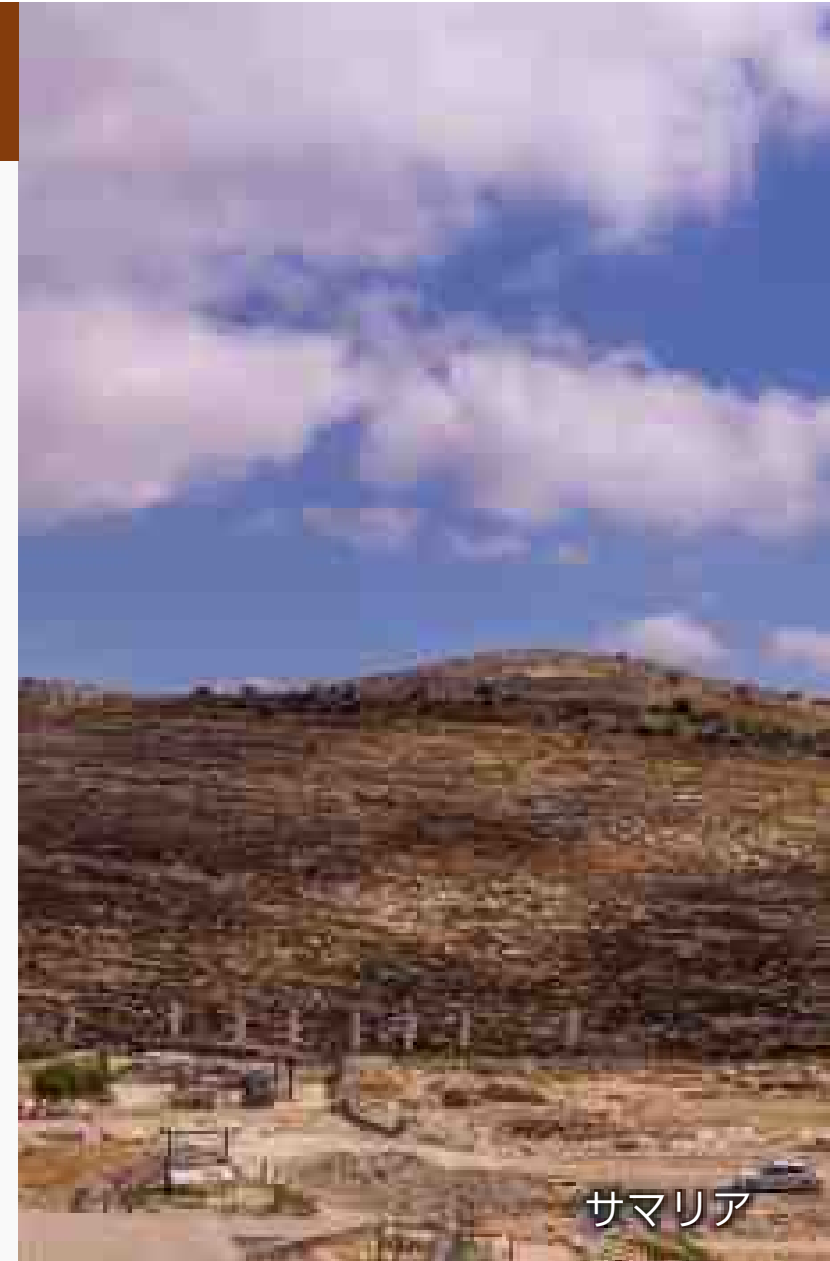
III. 包囲されたサマリア 6章24～33節

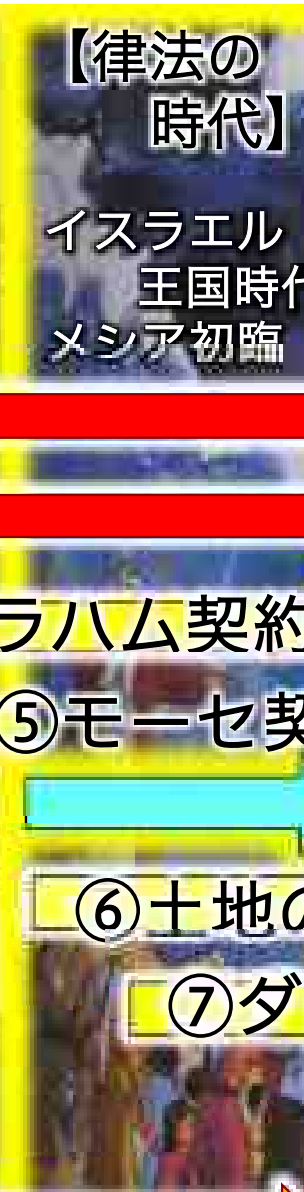
IV. よい知らせの日 7章1～20節

V. まとめと適用

罪を思い知らされて知る

計り知れない主の憐れみ





【無垢の時代】

天地創造

【良心の時代】

墮罪
~大洪水

【人類統治の時代】

バベルの塔事件

【約束の時代】

アブラハム
~ヤコブ

【律法の時代】

イスラエル
王国時代
メシア初臨

【恵みの時代】

聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨

【御国の時代】

千年王国
大審判
新天新地

①エデン契約

②アダム契約

③ノア契約

④アブラハム契約

⑤モーセ契約

⑥土地の契約

⑦ダビデ契約

⑧新しい契約

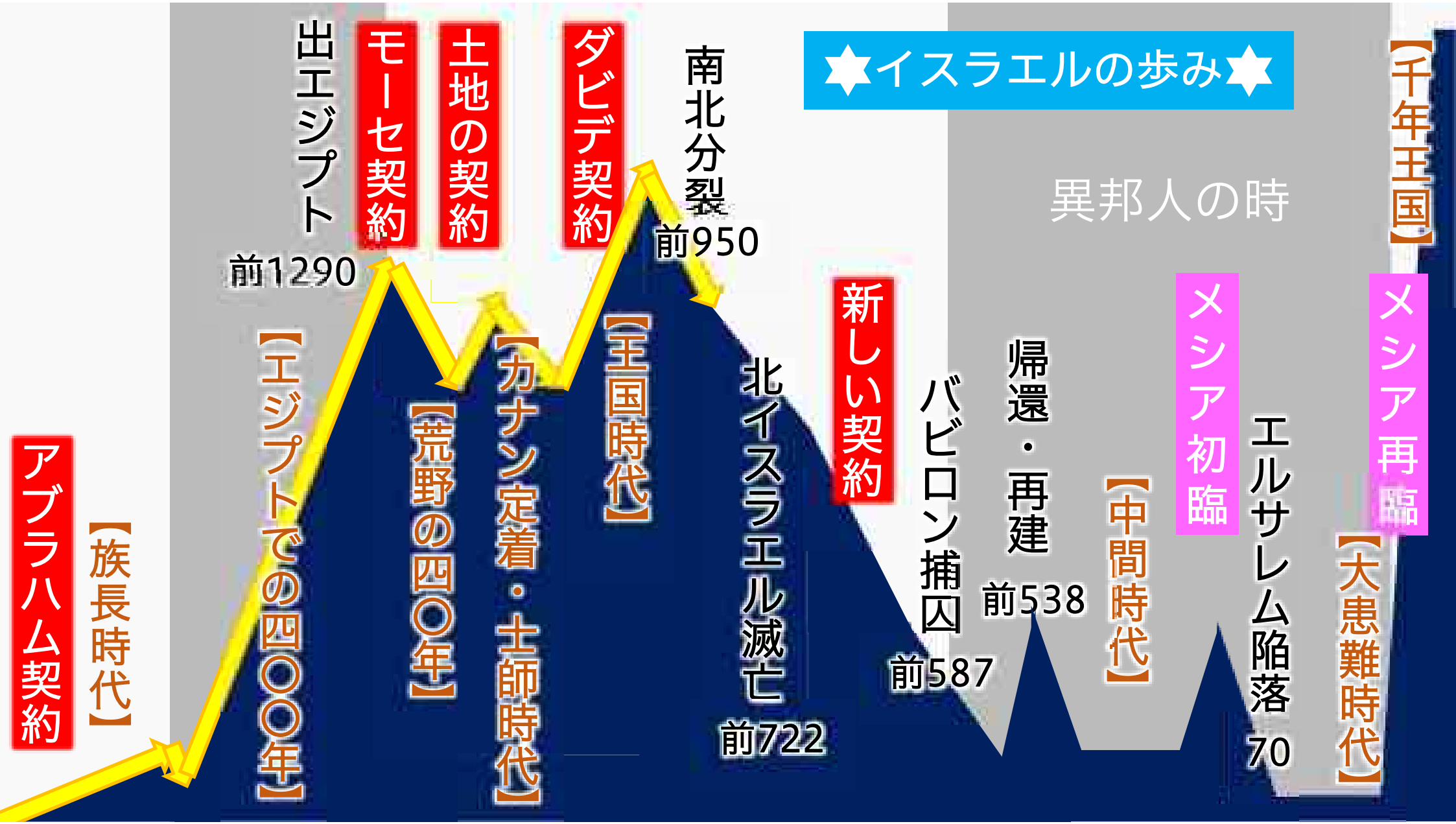
どの時代も
神の約束が礎にある

過去

現在

未来

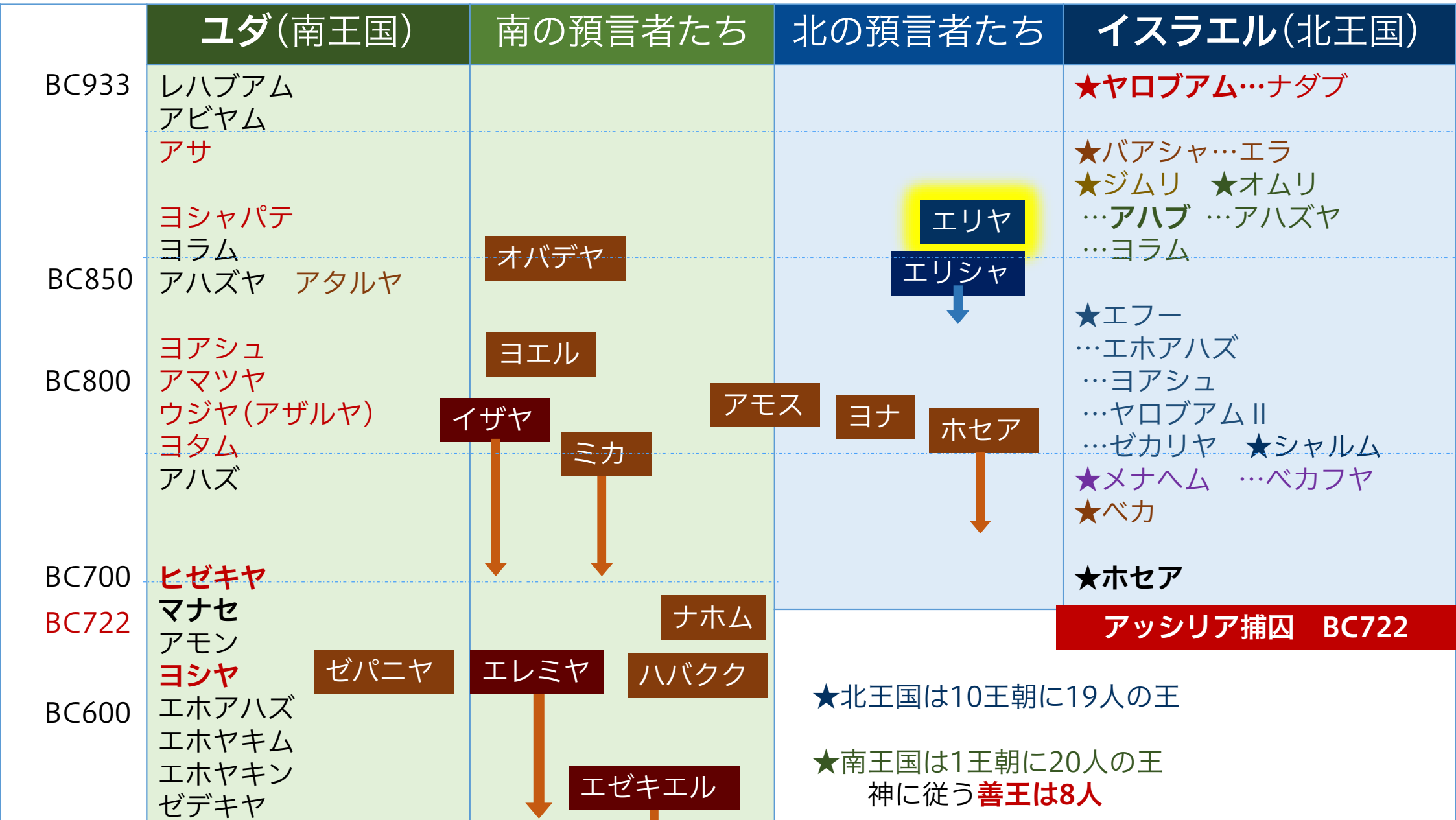
★イスラエルの歩み★



列王記 (第一〜第二)

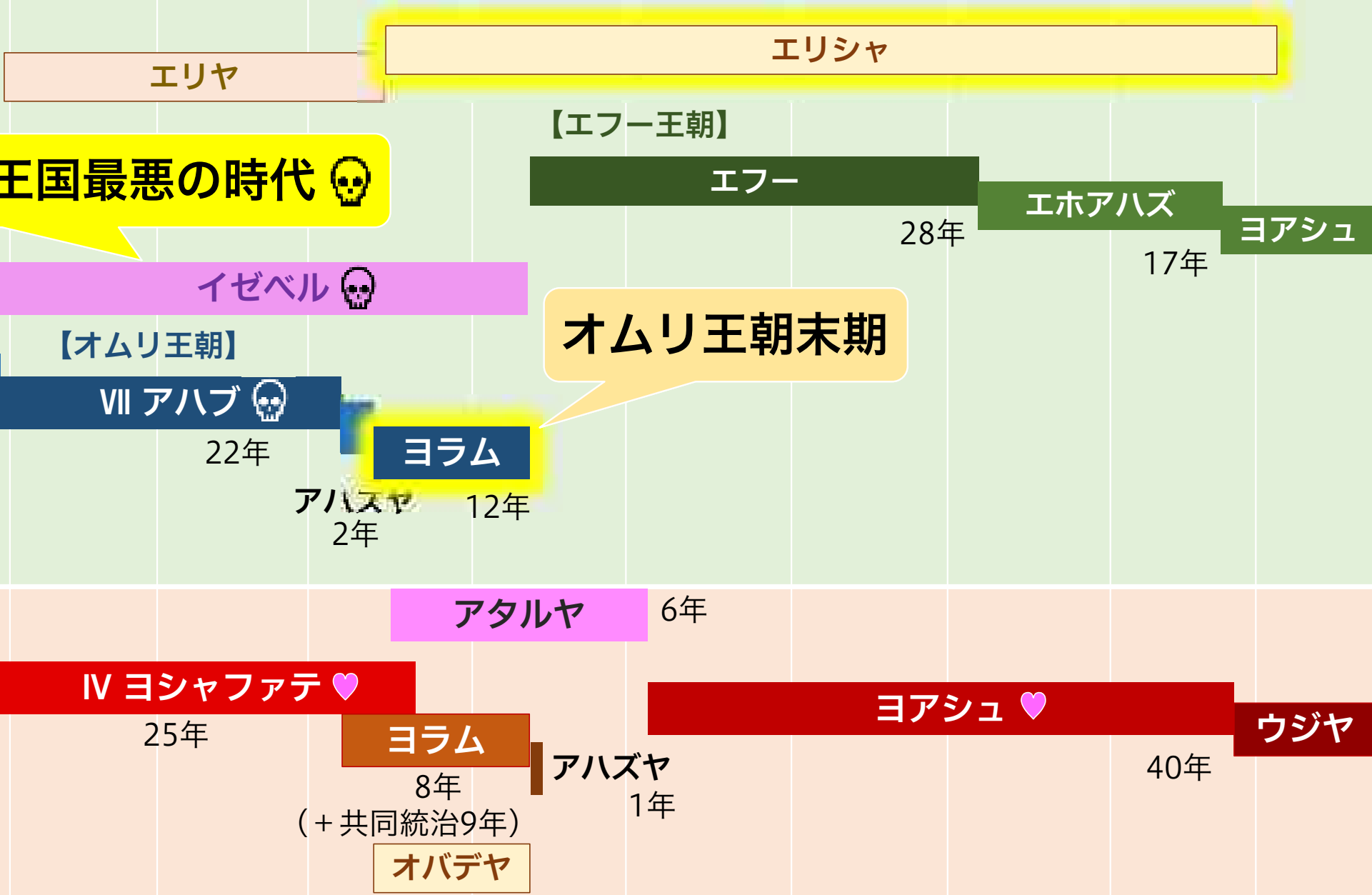
第一	1〜11章	ソロモン王の治世 神殿建築	イスラエル(統一王国)		
	12〜16章	王国の分裂	ユダ(南王国)	イスラエル(北王国)	
第二	17〜22章	預言者エリヤ (アハブ王の生涯)	レハブアム アビヤム アサ ヨシャパテ ヨラム アハズヤ アタルヤ ヨアシュ アマツヤ ウジヤ ヨタム アハズ ヒゼキヤ マナセ アモン ヨシヤ エホアハズ エホヤキム エホヤキン ゼデキヤ	オバデヤ ヨエル イザヤ ミカ エレミヤ エゼキエル	ヤロブアム…ナダブ バアシャ…エラ ジムリ オムリ…オムリ…アハブ …アハズヤ…ヨラム エフー…エホアハズ …ヨアシュ …ヤロブアムII …ゼカリヤ シャルム メナヘム ベカフヤ ベカ ホセア
	1〜2章			エリヤ エリシャ アモス ヨナ	
	2〜13章	預言者エリシャ		ホセア	
	14〜17章	二つの王国の歴史 北王国滅亡まで			
	18〜25章	ユダ王国の歴史 滅亡まで			

★北王国は10王朝に19人の王
★南王国は1王朝に20人の王



北王国 イスラエル

南王国 ユダ



【エリヤとエリシャ】 II 列王記

- 孤独な預言者エリヤは、残れる信仰者たちと出会い、後継者**エリシャ**を得た。
- エリヤが組織した預言者学校で**エリシャ**も学び、エリヤの携拳後、正式に後継者に。多くの奇跡は、神による権威の保証だった。
- アラムの将軍ナアマンは、**エリシャ**をたずね、ツアラアトを癒やされた。**エリシャ**を通し、異邦人にまで、栄光の神の御名が知らされた。





Ⅰ. 浮かんだ斧

列王記第二 6章1～7節

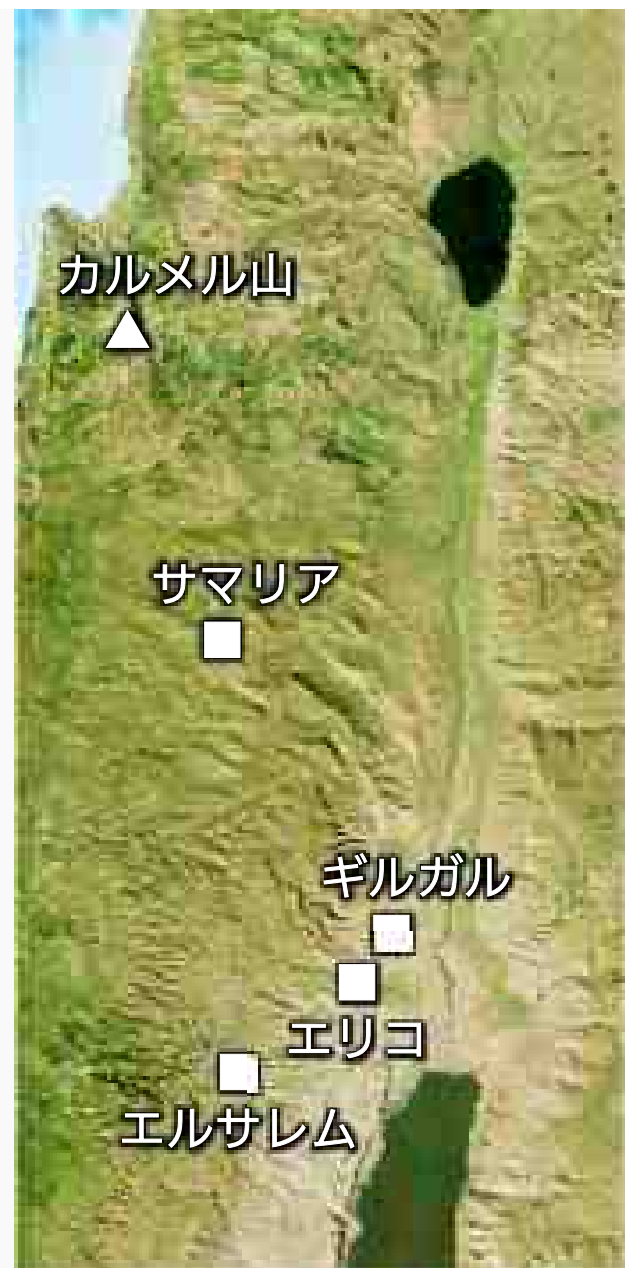
ヨルダン川

【開拓へ】 II 列王記6:1～2

預言者の仲間たちがエリシャに、「ご覧のとおり、私たちがあなたと一緒に住んでいるこの場所は狭くなりました*」ので、ヨルダン川に行きましょう。そこから各自一本ずつ梁にする木を切り出して*、そこに私たちの住む場所を作りましょう」と言うと、エリシャは「行きなさい」と言った。

*苦難の中でも拡大していた預言者学校。

*壁は、石、日干煉瓦。木材は天井の梁など一部。



【ヨルダン川で】 Ⅱ 列王記6:3～5

すると一人が、「どうか、ぜひ、しもべたちと一緒に来てください」と言ったので、エリシャは「では、私も行こう」と言って、彼らと一緒に出かけた。彼らはヨルダン川に着くと、木を切り倒した。

一人が梁にする木を切り倒しているとき、斧の頭が水の中に落ちてしまった。彼は叫んだ。「ああ、主よ、あれは借り物です。」



【浮かんだ斧】 Ⅱ列王記6:6～7

神の人は言った。「どこに落ちたのか。」彼がその場所を示すと、エリシャは一本の枝を切ってそこに投げ込み*、斧の頭を浮かばせた。

彼が「それを拾い上げなさい」と言ったので、その人は手を伸ばして、それを取り上げた。

*主がエリシャに促した行為。

➡忠実に従ったことに意味がある。

■度重なる奇跡は、イスラエルの残された信仰者たちと、主が共におられた、確かなしるし。





II. 天の軍勢

列王記第二 6章7～23節

現在のギルガル付近

【神の人の警告】 II 列王記6:8～10

さて、アラムの王がイスラエルと戦っていたとき*、彼は家来たちと相談して言った。「これこれの場所に陣を敷こう。」

← 隊商を待ち伏せして略奪

そのとき、神の人(エリシャ)はイスラエルの王のもとに人を遣わして言った。「あの場所を通らないように注意しなさい。あそこにはアラム人が下って来ますから。」

イスラエルの王は、神の人が告げたその場所に人を遣わした。神の人が警告すると、王はそこを警戒した。このようなことは一度や二度ではなかった。

*アラム諸地方の略奪隊が度々越境していた。



【アラム王の命令】 Ⅱ列王記6:11～13

このことで、アラムの王の心は激しく動揺した。彼は家来たちを呼んで言った。「われわれのうちのだれがイスラエルの王と通じているのか、おまえたちは私に告げないのか。」

すると家来の一人が言った。「いいえ、わが主、王よ。イスラエルにいる**預言者エリシャ**が、あなたが寝室の中で語られることばまでもイスラエルの王に告げているのです。」

王は言った。「行って、彼がどこにいるかを突き止めよ。人を遣わして、彼を捕まえよう。」そのうちに、「今、彼は**ドタン**にいる」という知らせが王にもたらされた。



【包囲されたドタンの町】 II 列王記6:14～16

そこで、王は馬と戦車と大軍をそこに送った。
彼らは夜のうちに来て、その町を包囲した。

神の人の召使いが、朝早く起きて外に出ると、
なんと、馬と戦車の軍隊がその町を包囲していた。
若者がエリシャに、「ああ、ご主人様。どうしたら
よいのでしょうか」と言った。

すると彼は、「恐れるな。私たちとともにいる
者は、彼らとともにいる者よりも多いのだから」
と言った。



【天の軍勢】 II 列王記6:17~18

そして、エリシャは祈って【主】に願った。

「どうか、彼の目を開いて、見えるようにしてください。」【主】がその若者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、**火の馬と戦車***がエリシャを取り巻いて山に満ちていた。

アラム人がエリシャに向かって下って来たとき、彼は【主】に祈って言った。「どうか、この民を打って目をくらませてください。」そこで主はエリシャのことばのとおり、彼らを打って目をくらまされた。

***天の軍勢**



【包囲されたアラム軍】 II 列王記6:19～20

エリシャは彼らに言った。「こちらの道でもない。あちらの町でもない。私について来なさい。あなたがたの捜している人のところへ連れて行ってあげよう。」こうして、彼らをサマリアへ連れて行った。

彼らがサマリアに着くと、エリシャは言った。「【主】よ、この者たちの目を開いて、見えるようにしてください。」【主】が彼らの目を開き、彼らが見ると、なんと、自分たちはサマリアの真ん中に来ていた。



【歓待と解放】 Ⅱ列王記6:21～23

イスラエルの王は彼らを見て、エリシャに言った。「私が打ち殺しましょうか。私が打ち殺しましょうか。わが父よ。」

エリシャは言った。「打ち殺してはなりません。あなたは、捕虜にした者を自分の剣と弓で打ち殺しますか。彼らにパンと水を与え、食べたり飲んだりさせて、彼らの主君のもとに行かせなさい。」

そこで、王は彼らのために盛大なもてなしをして、彼らが食べたり飲んだりした後、彼らを帰した。こうして彼らは自分たちの主君のもとに戻って行った。それ以来、アラムの略奪隊は二度とイスラエルの地に侵入しなかった。



アラムの略奪隊は主を恐れた



Ⅲ. 包囲されたサマリア

列王記第二 6章24～33節

サマリアの遺跡

【包囲されたサマリア】 II 列王記6:24～25

この後、アラムの王ベン・ハダドは全軍を召集し、サマリアに上って来て、これを包囲した。

サマリアには大飢饉が起こっていて、また彼らが包囲していた*ので、ろばの頭一つが銀八十シェケル(912g)で売られ、鳩の糞*一カブの四分の一(0.3ℓ)が銀五シェケル(57g)で売られるようになった。

*大飢饉に敵の大軍の包囲が重なった最悪の状況。

*植物の名称? …鳩の糞にしかならない実?

■食糧も燃料も枯渇。けがれた口バまで食用に。



【女の叫び】 II 列王記6:26～27

イスラエルの王が城壁の上を通りかかると、一人の女が彼に叫んだ。「わが主、王よ。お救いください。」

王は言った。「【主】があなたを救わないのなら、どのようにして、私があなたを救うことができるだろうか。打ち場*の物をもってか。それとも、踏み場*の物をもってか。」

*麦打ち場、麦踏み場。➡脱穀場に麦はない。

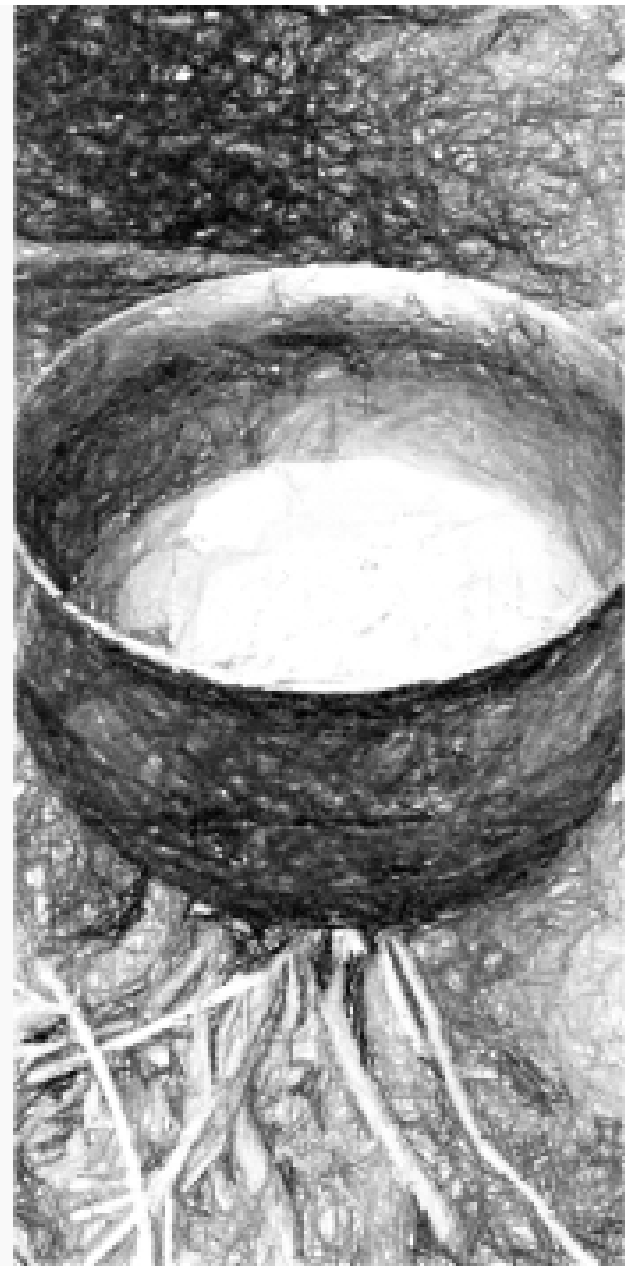


【惨劇】 II 列王記6:28～29

それから王は彼女に尋ねた。「いったい、どうしたというのか。」彼女は答えた。

「この女が私に『あなたの子どもをよこしなさい。私たちは今日、それを食べて、明日は私の子どもを食べましょう』と言ったのです。」

それで私たちは、私の子どもを煮て食べました。その翌日、私は彼女に『さあ、あなたの子どもをよこしなさい。私たちはそれを食べましょう』と言ったのですが、彼女は自分の子どもを隠してしまったのです。」



【衣を引き裂く王】 II 列王記6:30~31

王はこの女の言うことを聞くと、自分の衣を引き裂いた。彼は城壁の上を通過していたので、民が見ると、なんと、王は衣の下に粗布を着ていた*。


彼は言った。「今日、シャファテの子エリシャの首が彼の上についていれば*、神がこの私を幾重にも罰せられますように。」

*荒布(黒山羊の毛皮)は、悔い改めのしるし。

→預言者エリヤが、いつも着ていたもの。

*エリシャに責任をなすりつけるヨラム王

→この期に及んで悔い改めに至らない!!



王が民の先頭で
悔い改めるべき

神のせいに
するのと同じ!!

モーセを通して告げられていた
律法を破り、神に背いたイスラエルへの警告の預言

申命記 28章

申命記28章58～59節

もしあなたが、この書物に記されている、このおしへのすべてのことばを守り行わず、この栄光に満ちた恐るべき御名、あなたの神、【主】を恐れないなら、【主】はあなたへの災害、あなたの子孫への災害を驚くべき仕方下される。

申命記28章56～57節

あなたのうちの優しく上品な女で、あまりにも上品で優しいために、足の裏を地面に付けようとしぬ者でさえ、愛する夫や、息子や娘に物惜しみをし、

さらには、あらゆる欠乏のために、自分の脚の間から出た後産や自分が産んだ子さえ、ひそかに食べることまでする。あなたの町囲みの中が包囲と、敵がもたらす窮乏の中にあるからである。



IV. よい知らせの日

列王記第二 7章1～20節

乾季のサマリア

【王よりの使者】 II 列王記6:32～33

エリシャは自分の家に座っていて、長老たちも彼と一緒に座っていた。王は一人の者を自分のもとから遣わした。しかし、その使者がエリシャのところに着く前に、エリシャは長老たちに言った。「**あの人殺し**が、私の首をはねに人を遣わしたのを知っていますか。気をつけなさい。使者が来たら戸を閉め、戸を押しても入れないようにしなさい。そのうしろに、**彼の主君**の足音がするではありませんか。」

彼がまだ彼らと話しているうちに、使者が彼のところに下って来て言った。「見よ、これは**【主】**からのわざわいだ。これ以上、私は何を**【主】**に期待しなければならないのか。」



民の苦しみの
原因は王の不信仰

使者の背後に
燃える王の怒り

【エリシャの預言】 II 列王記7:1～2

エリシャは言った。「【主】のことばを聞きなさい。【主】はこう言われる。『明日の今ごろ、サマリアの門で、上等の小麦粉一セア(7.6ℓ)が一シェケル(11.4g)で、大麦二セア(15.2ℓ)が一シェケルで売られるようになる。』」

しかし、侍従で、王が頼みにしていた者が、神の人に答えて言った。「たとえ【主】が天に窓を作られたとしても、そんなことがあるだろうか。」そこで、エリシャは言った。「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。」



王の部下も
不信仰者

【4人の患者の覚悟】 Ⅱ列王記7:3～4

さて、ツアラアトに冒された四人の人*が、町の門の入り口にいた。彼らは互いに言った。

「われわれはどうして死ぬまでここに座っていなければならないのか。

たとえ町に入ろうと言ったところで、町は食糧難だから、われわれはそこで死ななければならない。ここに座っていても死ぬだけだ。さあ今、アラムの陣営に入り込もう。もし彼らがわれわれを生かしておいてくれるなら、われわれは生き延びられる。もし殺すなら、そのときは死ぬまでのことだ。」

*一人は、エリシャの元弟子ゲハジ？(列Ⅱ8:4)



【アラムの陣営】 II 列王記7:5～7

こうして、彼らはアラムの陣営に行こうと、夕暮れになって立ち上がり、アラムの陣営の端まで来た。すると、なんと、そこにはだれもいなかった。

これは、主がアラムの陣営に、戦車の響き、馬のいななき、大軍勢の騒ぎを聞かせたので、彼らが口々に「見よ。イスラエルの王が、ヒッタイト人*の王たち、エジプトの王たちを雇って、われわれを襲って来る」と言い、夕暮れに立って逃げ、自分たちの天幕や馬やろば、陣営をそのまま置き去りにして、いのちからがら逃げ去ったからであった。

*南部の荒野の遊牧民。ウリヤもヒッタイト人。



【正しくないこと】 II 列王記7:8～9

ツアラアトに冒されたこの人たちは、陣営の端に来て、一つの日幕に入って食べたり飲んだりし、そこから銀や金や衣服を持ち出して隠した。また戻って来てはほかの日幕に入り、そこからも持ち出して隠した。

彼らは互いに言った。「われわれのしていることは正しくない。今日は良い知らせの日なのに、われわれはためらっている。もし明け方まで待っていたら、罰を受けるだろう。さあ、行こう。行って王の家に知らせよう。」



【報告】 II 列王記7:10~11

彼らは町に入って門衛を呼び、彼らに告げた。「われわれがアラムの陣営に入ってみると、なんとそこにはだれの姿もなく、人の声もありませんでした。ただ、馬やろばがつながれたままで、天幕もそっくりそのままでした。」

そこで門衛たちは叫んで、門内の王の家に告げた。

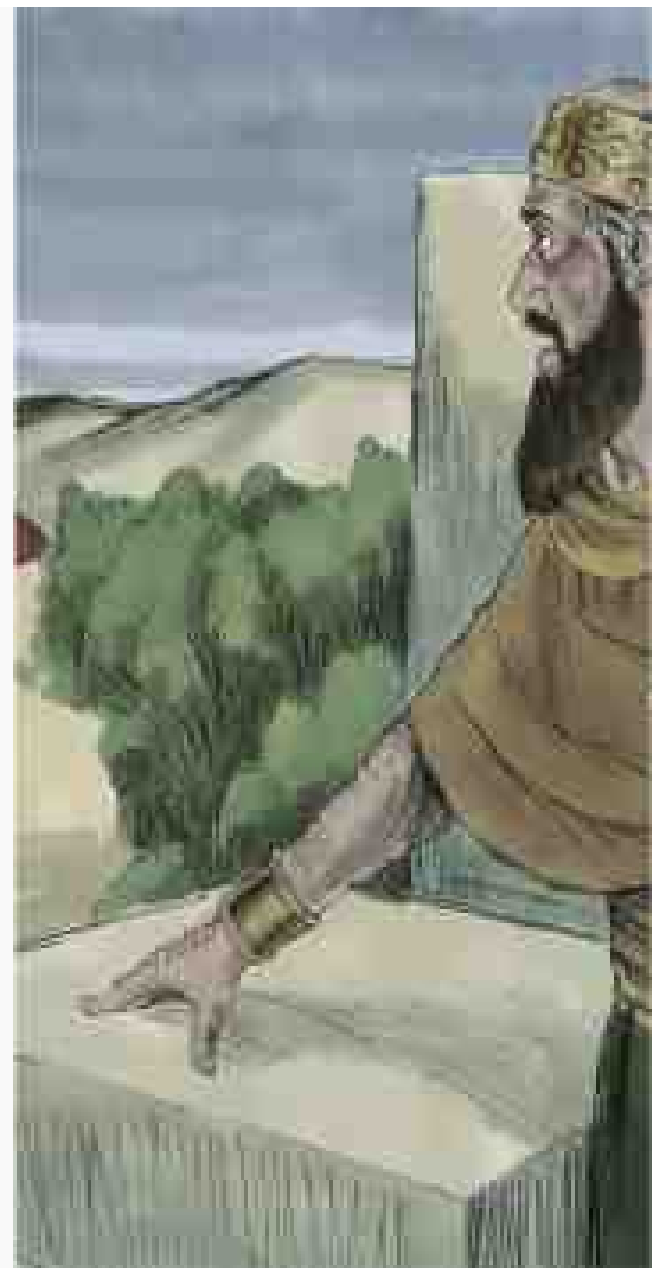


【王の疑念】 II 列王記7:12

王は夜中に起きて*家来たちに言った。「アラム人がわれわれに対して謀ったことをおまえたちに教えよう。彼らはわれわれが飢えているのを知っているので、陣営から出て行って野に隠れ、『イスラエル人が町から出たら生け捕りにし、それから町に押し入ろう』と考えているのだ。」

*知らせを受け、夜中に家臣が招集された。

■エリシャの預言は、完全に抜け落ちている王。



【開き直る家来】 II 列王記7:13

すると、家来の一人が答えた。

「それでは、だれかにこの町に残っている馬*の中から五頭を取らせ、遣わして調べさせてみましょう。どうせ、この町に残っているイスラエルのすべての民衆も、すでに滅んだイスラエルのすべての民衆と同じ目にあうのですから。」

*保持していた軍馬。



【アラムの置き土産】 Ⅱ 列王記7:14～15

彼らが二台分の戦車の馬を取ると、王は「行って確かめて来い」と命じて、アラムの軍勢を追わせた。

彼らはアラム人を追って、ヨルダン川まで行った。ところが、なんと、道はいたるところ、アラム人が慌てて逃げるときに捨てていった衣服や武具でいっぱいであった。使者たちは帰って来て、このことを王に報告した。

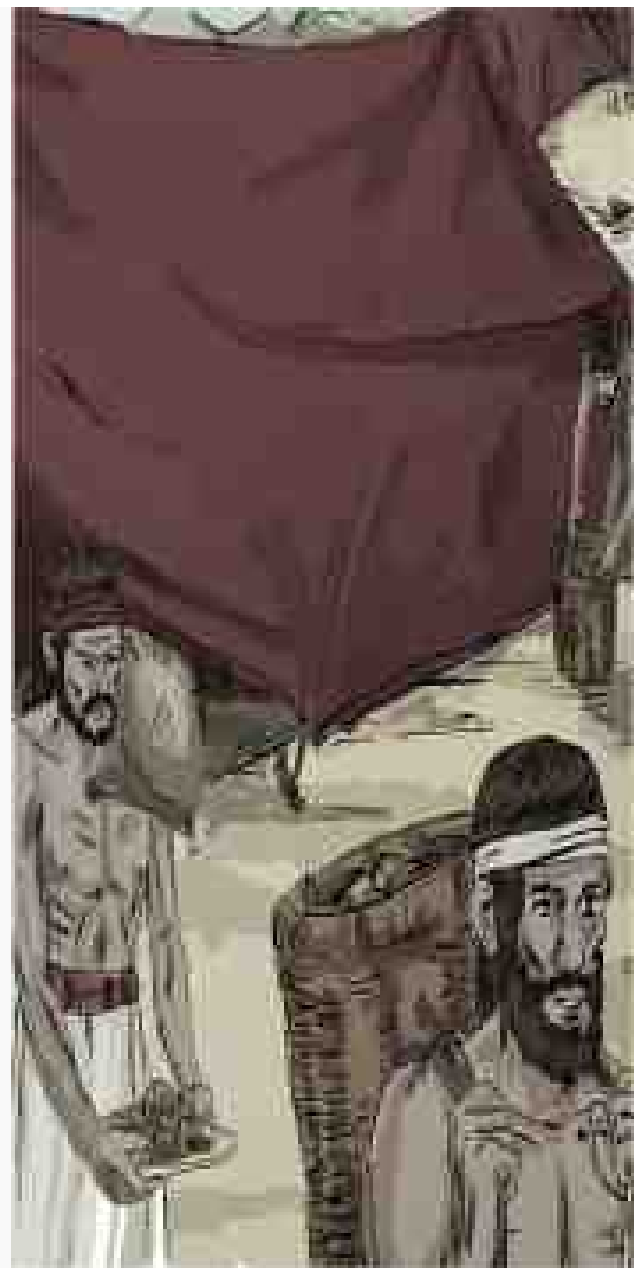


【エリシャの預言の成就】 Ⅱ列王記7:16～17

そこで、民は出て行ってアラムの陣営をかすめ奪ったので、【主】のことばのとおり、上等の小麦粉一セアが一シェケルで、大麦二セアが一シェケルで売られた。

王は例の侍従、頼みにしていた侍従を門の管理に当たらせたが、民が門で彼を踏みつけた*ので、彼は死んだ。王が神の人のところに下って行ったときに、神の人が告げたことばのとおりであった。

*門に押し寄せた群衆に押しつぶされて圧死。




【神の言葉の通りに】 Ⅱ 列王記7:18～20

かつて神の人が王に、「明日の今ごろ、サマリアの門で、大麦二セアが一シェケルで、上等の小麦粉一セアが一シェケルで売られるようになる」と言ったときに、

侍従は神の人に答えて、「たとえ【主】が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか」と言った。そこで、エリシャは「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない」と言った。

そのとおりのことが彼に実現した。民が門で彼を踏みつけたので、彼は死んだ。





V. まとめと適用

罪を思い知らされて知る
計り知れない主の憐れみ

サマリアのオリーブ畑

【約束の神のイスラエルへの深い憐れみ】

- イスラエルの不信仰が招いたアラムの侵略。
ヤロブアム以来、積み重なってきた罪は、臨界点に迫っていた。
- サマリアの飢餓の惨状も、やがて来る災厄の前触れでしかない。
それでも悔い改めず、預言者と神に責任をなすりつけるだけの王。
- しかし主は、一方的にイスラエルを救い出された。
アブラハム、モーセ、ダビデへの約束と、
イスラエルの残れる者の信仰のゆえに。

【イスラエルの残れる者の使命】

■ 不信仰な王と対照的なのが、**荒野の預言者たち**。

成長し、拡大していた小さな群れを、苦難の時代に主が守られた。

■ **残れる者(レムナント)**のゆえに、主はイスラエルを保たれる。

真の信仰者の系譜は、決して断たれることなく、継がれてきた。

■ **現代のレムナント、メシアニックジュー**を覚えて祈ろう。

悔い改めたイスラエルの民の存在ゆえ、この時代は支えられている。

【イスラエルの不信仰と回復の幻】

- すっぽ抜けて水底に沈んだ斧の頭が示すのは、**不信仰**のイスラエル。主を証しする本来の使命を外れ、滅びにひた走るばかり。
- しかし、主が不可能を可能にされる。重い斧を浮かばせたように、積年の不信仰から、イスラエルを主が**回心**に導かれる時は来る。
- 絶望の時代に預言者たちを支えたのは、終末の**究極的な回復**の約束。アラムを撃退し、飢えを満たし、豊かな富を得たイスラエルの姿は、メシアが打ち建てられる神の国の究極のゴールを指し示している。

エリシャが示したのは、すべての預言の土台となる神の計画の確かな道筋

ヨエル書 2章10～14節

預言者たちに与えられた主の日の幻
世の終わりのイスラエルへの裁きと警告
民族的回心と回復の希望

ヨエル書 2章10～11節

地はその前で震え、天も揺れる。

太陽も月も暗くなり、星もその輝きを失う。

【主】はご自分の軍隊の先頭に立って声をあげられる。
その陣営は非常に大きく、主のことばを行なう者は強い。

【主】の日は偉大で、非常に恐ろしい。

だれがこの日に耐えられるだろう。

ヨエル書 2章12~14

「しかし、今でも——【主】のことば——心のすべてをもって、
断食と涙と嘆きをもって、わたしのもとに帰れ。」

衣ではなく、あなたがたの心を引き裂け。

あなたがたの神、【主】に立ち返れ。主は情け深く、あわれみ深い。
怒るのに遅く、恵み豊かで、わざわざを思い直してくださる。

もしかすると、主が思い直してあわれみ、

祝福を後に残しておいてくださるかもしれない。

あなたがたの神、【主】への穀物と注ぎのささげ物を。

【残された主へのささげもの。イスラエルの残れる信仰者】

- イスラエルの残れる者(レムナント)とは、まさに、主へのささげものとして残された者。
 - ➡今の教会時代においては、メシアニックジュー。
 - そして、大患難時代に回心に導かれるすべてのイスラエル。
- 異邦人クリスチャンが、アブラハム契約に接ぎ木された者ならば、残れる者としての苦難からも当然、私たちは逃れようはない。
 - ➡イスラエルですら残れる者は少数なら、異邦人にはなおさら。

私たちクリスチャンに求められている、少数者の覚悟がある

【はるかな将来の約束を信じて、今を歩もう】

■ 日本に霊的大覚醒・リバイバルはやってくる？

必ず来ると断言できるのは、大患難時代のただ中において。

携拳される私たちは、結局、リバイバルとは無縁なのかもしれない。

■ 預言者が見たのは、いまだに実現されていない、はるかな将来の幻。

しかし、主の約束を信頼して歩む者の今を、主は確かに支えられる。

■ 苦難の中でも主に仕え、日毎の糧を与えられた預言者たち。

私たちも、主の約束に信頼して歩むなら、日々の必要は満たされる。

主に仕え、主の使命を果たしているか。問われているのは、それだけだ。

【罪を思い知らされて知る、計り知れない主の恵み】

- ウクライナ戦争の背後にある世界大戦からの闇。
…ナチスのホロコースト、ロシアのポグロム。ソ連の大粛清。
欧州のキリスト教国と呼ばれる国々の根に、はびこり続ける不信仰。
- 突き詰めて浮かび上がるのは、どうしようもない人間の罪の現実。
人は罪であり、世は悪。今、人類が生かされているのは神の奇跡。
- 自分と世界の罪悪を突きつけられて、どん底に落ちる者は幸いだ。
打ち砕かれ切ったその身に魂に、主の恵みが降り注ぎ、染み渡る。

私には何も無いが、神の御手にはすべてがある。ただ主を信頼しよう。

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの罪(つみ)を贖(あがなう)うために十字架で死に、

②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、

③三日目に復活(ふっかつ)したことを信じます。

主イエスは、信じる者を携挙(けいきよ)され、世を裁(さば)き、

栄光の王として、永遠(えいえん)の王国を治(おさ)められます。

希望(きぼう)はただ、約束(やくそく)の主よ、あなただけにあります。

預言者(よげんしゃ)たちのように、主の約束に信頼(しんらい)し、

少数者(しょうすうしゃ)の覚悟(かくご)をもって、福音宣教(ふくいん

せんきょう)の使命(しめい)に 歩むものとしてください。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」